氏　　名	野田 千代子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第 17 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	沖縄県の小規模離島で働く看護職者に必要なコンピテンシー
論文審査委員	主査　教授　神里　みどり
	副査　教授　嘉手苅　英子
	副査　教授　大湾　明美
	副査　教授　川崎　道子
	副査　教授　前田　和子（千葉科学大学）

論文内容の要旨

【背景】　資源の乏しい小規模離島（以下、小離島とする）の島民の保健医療ニーズを充足するために、そこで働く数少ない看護職者は一人一人が良質な保健看護を提供しなければならない。そのために、彼らはどのような準備をして小離島に赴任すべきか、赴任後もどのような教育を受けるべきかが重要となる。国内外で看護職者のコア・コンピテンシーの特定とそれに基づく教育プログラムはいくつかあるものの、小離島の看護職者に必要なコンピテンシーの特定に焦点を当てた先行研究は国内外ともにまだ見当たらなかった。

【目的】　研究目的は、沖縄県の小離島で働く看護職者に必要なコア・コンピテンシーと、それらを構成しているより具体的なコンピテンシーを特定し、効果的な看護教育に資することである。

【方法】　コンピテンシーの分類については、大分類をコア・コンピテンシーとし、中分類と小分類をコンピテンシーとした。調査前に、看護職者のコア・コンピテンシーの特定に関する国内外の文献を検討した結果、The Massachusetts Nurse of the Future（2006 以下、NOF とする）を参考に本研究のコア・コンピテンシーとそれらの定義を作成した。具体的には、NOF の 10 のコア・コンピテンシーにある「患者中心のケア」を「島民と家族中心のケア」に、「安全」を「安全（良質なケア）」に修正し、さらに「文化的コンピテンシー」を追加し、「Ⅰ　島民と家族中心のケア」、「Ⅱ　文化的コンピテンシー」、「Ⅲ　チームワークと協働」、「Ⅳ　コミュニケーション」、「Ⅴ　リーダーシップ」、「Ⅵ　システムに基づく実践」、

「Ⅶ プロフッェッショナリズム」、「Ⅷ エビデンスに基づく実践」、「Ⅸ 質改善」、「Ⅹ 安全（良質なケア）」、「Ⅺ 情報科学と情報科学技術」の 11 のコア・コンピテンシーとした。本研究は調査前に沖縄県立看護大学の倫理審査の承認を得た（承認番号 12009 号、16018 号）。

＜第 1 段階（半構造化面接）＞　沖縄県の小離島での勤務経験のある看護師 9 名、保健師 11 名、医師 10 名の計 30 名への「小離島の看護職者に必要なコンピテンシーとは何か？」についての半構造化面接を実施し、コア・コンピテンシーを構成する中分類、小分類とコード（具体例）の特定を行った。調査期間は 2012 年 7 月~2013 年 3 月であり、1 名あたりの平均面接時間は 70 分であった。分析方法は、逐語録からデータをコード化したものを、該当する 11 のコア・コンピテンシーに当てはめた後に、類似するコードをまとめて小分類とし、さらに類似する小分類を中分類とした。

＜第 2 段階（質問紙調査、およびグループインタビュー）＞　まず、小離島等を含む看護経験が 10 年以上ある看護師 6 名、保健師 4 名の計 10 名への郵送法での質問紙調査を行った。この質問紙は第 1 段階の結果から得られた 70 項目のコンピテンシーについての中分類の重要度 5 段階評価（5 は非常に重要、4 はまあまあ重要、3 はどちらともいえない、2 はあまり重要ではない、1 は重要ではない）であり、看護師、保健師、それぞれについての該当する重要度へのチェックと、自由意見の記載を依頼した。調査期間は 2017 年 6 月であった。分析方法は、中分類とコア・コンピテンシー別に重要度の平均値と標準偏差を算出した。

次に、質問紙調査の参加者の中でグループインタビューの日程に参加可能だった看護師 4 名、保健師 3 名の計 7 名への 1. コア・コンピテンシーの名称、2. 看護師と保健師に共通のコンピテンシー、3. 看護師と保健師で異なるコンピテンシー等についての意見を聴取するためにグループインタビューを実施した。実施日は 2017 年 7 月 1 日であり、所要時間は 130 分間であった。分析方法は、逐語録からデータをコード化し、類似するコードをカテゴリー化してまとめた。

【結果】

＜第 1 段階（半構造化面接）＞　半構造化面接の逐語録から小離島の看護職者に必要なコンピテンシーに関する記述を質的に分析した結果、11 のコア・コンピテンシーの中に 70 の中分類、112 の小分類、1578 のコードに分類できた。（　）内の数字は中分類数、≪　≫内の数字は小分類数、〈　〉内の数字はコード数を示す。コード数が多かったのは、「Ⅹ 安全（良質なケア）：13≪61≫〈646〉」、「Ⅲ チームワークと協働：(4) ≪14≫〈295〉」、「Ⅶ プロフェッショナリズム：(15) ≪17≫〈269〉」、「Ⅳ コミュニケーション：(7) ≪11≫〈144〉」、「Ⅰ 島民と家族中心のケア：(9) ≪7≫〈91〉」、「Ⅱ 文化的コンピテンシー：(4) 〈55〉」、

「Ⅵ システムに基づく実践：(3) 〈26〉」、「Ⅴ リーダーシップ：(5) ≪2≫ 〈25〉」、「Ⅸ 質改善：(4〈14〉」、「Ⅷ エビデンスに基づく実践：(3) 〈26〉」、「Ⅺ 情報科学と科学技術：(3) 〈7〉」の順であった。

＜第2段階（質問紙調査、およびグループインタビュー）＞　質問紙調査の結果から、各コア・コンピテンシーの重要度は、看護師3.7～4.6、保健師4.0～4.8であり、両職種ともに主に5段階評価の4の「まあまあ重要」が多く評価されていた。また、全体のコア・コンピテンシーの重要度は、看護師4.1、保健師4.3であった。両職種を合わせたコア・コンピテンシーの重要度の上位3つは「Ⅲ チームワークと協働：4.6」、「Ⅳ コミュニケーション：4.5」、「Ⅱ 文化的コンピテンシー：4.4」であり、看護師の上位3つは「Ⅲ チームワークと協働：4.6」、「Ⅳ コミュニケーション：4.5」、「Ⅰ島民と家族中心のケア：4.2」であり、保健師の上位3つは「Ⅱ 文化的コンピテンシー：4.8」、「Ⅲ チームワークと協働、およびⅥ システムに基づく実践：4.6」であった。

次に、グループインタビューの逐語録から、コア・コンピテンシーの名称についての7つのコードから【「Ⅹ 安全（良質なケア）」と「Ⅸ 質改善」が混乱しやすい】、【「Ⅸ 質改善」と「Ⅷ エビデンスに基づいた実践」の重要性が認識しにくい】、【「Ⅸ 質改善」は看護の現場で使用する「管理」と混乱しやすい】の3つの中分類が導き出された。これらを踏まえ、コア・コンピテンシーの名称を「Ⅹ 安全（良質なケア）」から「Ⅹ 小離島での安全なケア」に、「Ⅸ 質改善」から「Ⅸ データ等を活用した質改善」に修正した。

【結論】　本研究は、小離島で働く看護職者の教育に活かすため、彼らに必要なコンピテンシーを特定するために調査した。その結果、次の3点が明らかになった。まず、小離島の看護職者に必要なコンピテンシーの枠組みを「Ⅰ 島民と家族中心のケア」、「Ⅱ文化的コンピテンシー」、「Ⅲ チームワークと協働」、「Ⅳ コミュニケーション」、「Ⅴ リーダーシップ」、「Ⅵ システムに基づく実践」、「Ⅶ プロフェッショナリズム」、「Ⅷ エビデンスに基づく実践」、「Ⅸ データ等を活用した質改善」、「Ⅹ 小離島での安全なケア」、「Ⅺ 情報科学と科学技術」の11のコア・コンピテンシーで構成することが適切である。第2に、11のコア・コンピテンシーは70の中分類、112の小分類が特定され、具体的なコンピテンシーが明確になったため、彼らの研修や教育の内容・方法等に活用できる。第3に、70の中分類の重要度5段階評価において、全体のコア・コンピテンシーの重要度は、看護師、保健師ともに5段階評価の4以上が多く、小離島の看護職者のコンピテンシーの内容の妥当性について合意が得られたことである。

今後は看護師と保健師のコンピテンシーの濃淡の差の特定を含めたコンピテンシー項目の精選と小離島での経験年数別のコンピテンシーの特定をしていく必要がある。さらに研

究参加者を沖縄県外の小離島の看護職者にも拡大し、県外の小離島にも適用できるように研究を発展させていくことで小離島の特殊性に対応した教育に寄与させていきたい。

論文審査結果の要旨

本研究は、沖縄県の小離島で働く看護職者に必要なコア・コンピテンシーと、それを構成している具体的なコンピテンシーを特定し、その妥当性を明確にしたものである。

沖縄県は 39 の有人離島を含む島嶼県であり、医療資源の乏しい小離島の看護職者の人材育成や人材確保は最優先の課題である。よって本研究によって、小離島の看護職者のコンピテンシーが具体的に示されたことで、基礎教育や継続教育、研修等の教育で活用する上での基礎資料となり得る。さらに、小離島看護職者が到達すべき能力や行動の可視化につながり、自己の到達地点や今後の学習すべき内容の確認に役立つ可能性が高い。これまで可視化されてこなかった小離島看護職者に必要なコンピテンシーを発展させることで、体系的な教育を構築することにもなり、ひいては小離島看護職者による質の高い看護援助の提供にもつながる。質の高い看護援助が提供されることで、医療資源の少ない小離島であっても小離島住民に対する保健・医療の質の担保につながる。そのような意味でも、本研究における小離島看護職者に必要なコンピテンシーの明確化は、人材育成の基盤、質の高い人材確保に影響を与え、重要で発展的な要素を含んだ研究であるといえる。

本研究の独創性として、小離島勤務経験のある看護師、保健師、医師、約 30 名からなる 3 者の立場から、小離島看護職者に必要なコンピテンシーを明確にしたことがあげられる。3 者の立場から見ることで、より客観的、かつ多面的な視点で小離島看護職者に必要なコンピテンシーが抽出できたのではと考えている。小離島では、その地理的特徴である環海性、隔絶性、狭小性を踏まえた上で、マンパワーや医療資源の乏しい地域で少数精鋭による看護職者の役割が求められている。よって、看護師と保健師の約 2 名の看護職者でやりくりしなければならず、おのずとそのコンピテンシーもお互いの相互作用でかみ合っていかないと成り立っていかない。従来の都市型とは異なる看護師、保健師の島嶼型コンピテンシーが必要になってくる。本研究で都市型との相異までは考察できていないが、少なくとも小離島に特化した看護師、保健師の具体的なコンピテンシーの特徴を抽出できたと考える。

コンピテンシーの抽出方法に関しては、最初にコンピテンシーの概念構造を明確にし、さらに国内外の島嶼看護やリモート、ルーラル看護に関するコンピテンシーの文献を綿密に検討し、その上でコアとなるコンピテンシーの枠組みを決定している。コアとなるコンピテンシーの枠組みは体系的で網羅的でなければならず、海に囲まれている小離島だからこそ、島民の命を守るためにも、極力、島内で完結できる保健医療体制を保てるような保健医療職者の役割が求められている。そのためにも少数精鋭であっても多様な役割をもった看護職者のコアとなるコンピテンシーは体系的で網羅的な枠組みが必要である。本研究では米国の看護教育を基盤とした、ルーラル地域でも活用されている 10 のコア・コンピテンシーの枠組みを参考にしている。その 10 の枠組みから、文化的コンピテンシーをあえて外に出した形で、11 のコア・コンピテンシーとすることで、文化的要素が色濃く残っている小離島の特徴がわかるような枠組みや名称にしている。その枠組みの妥当性については、緻密な文献検討によるものではあるが、本邦での島嶼看護に関する文献に限界があることから、今後実践で活用する上ではさらなる検証が必要である。

11 のコア・コンピテンシーを構成している具体的なコンピテンシーのコードは 1578 からなり、その中分類も 70 と多岐にわたる内容になっている。特に最もコード数の多かった「小離島での安全なケア、646」は、小児から高齢者までのあらゆる発達段階に対するケア、さらに予防から救急、見取りまでの多岐にわたる看護活動が含まれており、ルーラル看護などの概念構造で明確になっているジェネラリストのスペシャリストとしての多様な役割が含まれていた。これは、国内では、これまでにも経験知で理解がなされてきたレベルであったが、今回研究によって明らかになったことで、小離島の看護職者の看護実践がより学術的な視点で明確化できたのではと考えている。さらに、コード数が少なくても必要なコンピテンシーとして「エビデンスに基づく実践」や「質改善」のコンピテンシーのように、質の高いケアの担保のために今後強化していかなければならないコンピテンシーも含まれており、今後の課題とすべきコンピテンシーの内容が提示できている。さらに、これまであまり教育内容に反映されてこなかったプロフェッショナリズムは、小離島で孤独な中で看護活動を展開していく上での、自己の島に対する愛着の形成や自己の心身の健康管理を含めた看護職者としての自律的な基盤を提示できたことも特徴的な要素である。

最後にコンピテンシーの妥当性として、小離島勤務経験のある看護職者とのディスカッションやアンケート調査による重要度の調査にて、コンピテンシーの妥当性を確保している。看護師、保健師のコンピテンシーの重要度は職種の違いや役割の相違による重要度の

違いはあるが、重要度は 5 段階評価のほぼ 4 以上であり、抽出されたコンピテンシーの妥当性は担保できたのではと考える。しかし、厳密には申請者も言及しているようにデルファイ法などによるさらなるコンピテンシーの精選が必要である。これは今後の申請者の研究に期待したい。

審査会では主に、コア・コンピテンシーとコンピテンシーの相違やその抽出方法、目的とタイトルの整合性とタイトルの検討、考察の書き方に関する質疑であった。各審査委員の総合的な意見は下記のとおりであった。

・テーマと目的、結果の一貫性、考察と結果の組み立てが似ており、繰り返しの感じをうけるので、考察の組み立てを工夫する必要がある。論文としては意義のある研究である。

・多くの時間をかけて文献レビューを行い島嶼地域のコンピテンシーデータを抽出してきたプロセスは評価できる。しかし、考察については結果の内容を盛り込みながら活き活きと描写する工夫が必要である。完成度は高いとは言えないが課程博士としての今後の伸びしろに期待したい。

・緻密にデータを分析し、努力してこれまでまとめたてきたことは評価できる。これまでやられてない研究であり、テーマとしては独創性があり、今後活用させて頂きたい知見である。考察では小離島の特徴がもっと出せるような書き方の工夫が望ましい。

総合的に考察の完成度に課題はあるが、学位論文として、合格には達しているという審査委員の意見で一致した。